

平成二十五年卒業式式辞

寒さの厳しかった今年の冬でしたが、少しずつ日射しに春の気配がし、冬から春へとキャンパスにも春の花の時期が始まるうとしています。

本日、ここに岐阜県立国際園芸アカデミーを卒業してゆく十三名の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

ご参列の保護者の方々にも、心よりお祝いを申し上げます。

また、この度はご多忙にもかかわらず、岐阜県議会議員の先生方をはじめ、多数のご来賓の方々のご臨席を賜り、ここに岐阜県立国際園芸アカデミー卒業式を挙行できますことは、誠に大きな喜びでございます。皆様方には平素から本校の教育に多大なご支援、ご協力を賜っておりますことに、この場をお借りしまして改めて厚く御礼申し上げます。

さて、皆さんは二年前に大いなる志をもって、花と緑のエキスパートになるべく当校に入学してこられました。その入学式で私が式辞で述べたことを覚えておられるでしょうか。そこでは、有名なゲーテの言葉を引用し、これまでと違ってここでの学びは、自ら進んで知識を吸収し、それを実践に活かすことにあると述べたと思います。皆さんはきっとそのことを各自が自覚し、すばらしい学びの経験をされたと確信しています。今、このよき日を迎えるにあたって、皆さんはこのキャンパスで過ごした間の楽しかったことや苦しかったことなど色々な思い出がめぐってくると思います。その思い出は、皆さんを送り出す教職員も同じです。共に学んだ友人、キャンパス、時間など、その思い出は互いの人生にとってかけがいのないものです。そのかけがいのない経験が、これからの人生の大切な糧となることを願っています。

卒業は日本では業を終えるという意味ですが、アメリカではコメントメント・エクササイズといい、実習の始まりという意味があります。つまり、卒業は人生のスタートであり、実社会での学びの本番はこれから始まるということです。国際園芸アカデミーで学んだことを誇りとし、自信をもって実社会で生きて行ってほしいと思っています。

ここで社会への門出にあたり、手元にも示しました、これから述べる先人の言葉を捧げたいと思います。

その言葉は、「大いなる人となるの道は唯一つあるのみである。己の小さきを悟るのは其の一つである。己の大いなるを信ずるは他の一つである。」で、明治時代の文芸評論家、思想家であった高山樗牛によるものです。高山樗牛は日本や中国の古典に造詣が深く、東京大学でも教鞭をとられ、若くして亡くなっていますが、いくつかの名言といわれるものを残しています。その一つがこの言葉になります。分かりやすい言葉で、人が大成するためには二つのことを肝に銘じておきなさいということです。自分は小さな存在であるということを知っておき、一方で大きな潜在能力を持っていることを信じて行動しなさいということです。

ここに卒業を迎えられる皆さんは大きな仕事ができる能力をそれぞれが備えているのです。その能力を最大限に発揮できるかどうかは、皆さん自身にあるのです。自分の将来を創造するためにそれぞれが目的をもって当校で学んでくれたはずです。これからは現場での仕事を通して自らを高め、自分を創造していくのです。そこに人生の楽しみは必ずあるはずで、現状に満足することなく、自分の能力と感性を信じて上を目指してくれることを心より願っています。

最後にあたり、ここにめでたく皆さんが卒業を迎えられるのは、日頃の努力のたまものであるのももちろんですが、同時に周りで支えてくれたご家族と職員のお陰でもあることも伝えておきたいと思えます。その感謝の気持ちを忘れず、それに報いるのは、これからの人生において社会に還元してゆくことに他なりません。そのことをくれぐれも忘れないでください。

以上、皆さんの将来に幸多きことを祈って、はなむけの言葉といたします。

平成二十六年三月吉日

岐阜県立国際園芸アカデミー 学長 上田善弘